

樺太の光と影しのぶ

戦前の日本統治時代の建物や記念碑など史跡が数多く残るロシア・サハリン（樺太）南部。8月、ユジノサハリンスクから北緯50度の旧国境線まで車で北上する4泊5日のツアーに参加した。樺太時代の歴史の光と影をたどるツアーが組まれるのは年数回ほど。参加者には樺太出身者もあり、懐かしい景色に目を細めた。

（サハリンで岩崎志帆、写真も）

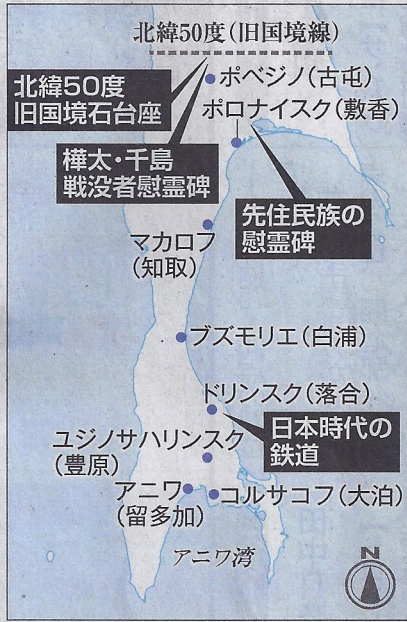


「心の中で『ソロジエー』と呼び掛けましょう。ウイグル族のあいさつです」。ツアー3日目の8月12日、サハリンの風景を約20年間撮り続けてきた稚内の写真家で、ガイドを務めた斉藤マサヨシさん(64)が参加者8人に語りかけた。

「心の中で『ソロジエー』（敷香）郊外の先住民族戦没者慰霊碑。ウイグルやニブフなど現地の先住民族の多くは戦中、日本軍にスパイとして徴用され、一部は戦後、旧ソ連に強制収容された。碑にはロシア語のキリル文字で死者名が刻まれているが、「キタムラ」「ナカガワ」と日本名ばかりだ。

日本名を押しつけられ、協力強いられた先住民族の悲哀をしのばせる。ツアーは新千歳から空路でユジノ入りし、東岸を北上して北緯50度の旧国境線に達した後、ユジノに戻り、

その南のゴルサコフ(大泊)も訪れる行程だった。2日目は宮沢賢治が「銀河鉄道の夜」の着想を得た旅路をたどった。その途中の落合駅跡はロシア風のドリンスク駅となり、脇で



参加者 北緯50度に到達し、旧国境標石の台座を見つめるツアー

稚内の旅行会社企画 引き揚げ者 故郷に涙



先住民族戦没者慰霊碑の前で戦中、戦後の歴史を説明するツアーガイドの斉藤マサヨシさん(右から2人目)

本時代のホームが朽ちかけていた。日本規格の線路は残るが、幅が広いロシア規格への切り替えが進み、「遠からず樺太時代の鉄路は消える」(斉藤さん)

3日目午後、やぶの中には北緯50度の国境標石の台座だけが残っていた。近くの旧日本軍の砲座跡には弾痕が残され、戦闘の激しさをうかがわせた。

戦後、日本人の引き揚げが一区切りしたのは1949年。ツアー参加者3人も引き揚げ者で、4年連続で出生地マカロフ(知取)訪問を果たした札幌市の渡辺博之さん(85)は「故郷の空気を吸いたくてね。つり橋の跡など来るたびに発見がある」と語った。

戦後、ゴルサコフ近くのアニワ(留多加)で生まれた帯広市の福田義明さん(73)は移動途中に故郷の街並みを眺め「記憶はないが、思い出がよみがえったよう」と涙ぐんだ。十勝管内芽室町の鈴木勝義さん(77)も2000年のツアーでは立ち寄れなかったユジノ郊外の生家近くを通り「感無量。亡くなった親も連れてきたかった」と話した。

サハリン観光はビザ取得が煩雑で、扱う旅行会社は一握り。6〜9月に運航していた稚内ーゴルサコフのフェリーは今年、費用負担を巡る日ロ協議が調わず運休となり、道内からは旅費が割高の空路だけとなった。斉藤さんは「もっと深く樺太の歴史を知ってほしい」と願い、ツアーを企画した北都観光(稚内)も「フェリーがあれば自転車も運べてアウトドア観光の可能性も広がる」と期待するが、再開を模索する稚内とゴルサコフの官民協議の展望は開けていない。